慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済学の始祖
Sub Title	Adam Smith, the founder of economics
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.6 (1976. 8) ,p.367(1)- 378(12)
JaLC DOI	10.14991/001.19760801-0001
Abstract	
Notes	『国富論』刊行200年記念特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19760801-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

経済学の始祖

高橋誠一郎

今年はアダム・スミスの名著『国富論』(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations.)がロンドンとダブリンで出版されてから,ちょうど200年になります。ロンドン版とダブリン版の関係は私には不明です。出版所はロンドン版の方は表題ページに W. Strahan and T. Cadell, in the Strand. と記されているに過ぎませんが,ダブリン版の方は Messrs Whitestone, Chamberlaine, W. Watson, Potts, S. Watson, Hoey, Williams, W. Colles, Wilson, Armitage, Walker, Moncrieffe, Jenkin, Gilbert, Cross, Mills, Hallhead, Faulkner, Hillary, and J. Colles と御丁寧に記されています。ロンドン版の方はタイトル・ページの裏面に同じ著者の前著『道徳情操論』(The Theory of Moral Sentiments.)の増補第4版(定価6シリング)の宣伝文が記されていますが,ダブリン版にはこれがありません。

ダブリン版は偽版であると主張する学者も多いようですが,そうも受け取りかねるところもあります。

スミスの思想は「既に幕末に我国に伝えられていた如くである」と,日本経済史研究所編『日本経済史辞典』は記していますが(昭和13年12月発行,同書第9分冊1806ページ),しかし,最初に彼の名を掲げ,もしくは彼の思想を紹介したものが何人であるかを挙示していないのが遺憾です。私も一向,こういう方面の研究をやっておりませんので何も申しあげることができないのが残念です。しかし,慶應義塾の経済学部はこれまで,種々なる機会においてこの経済学祖を記念する会を開き,その学恩を感謝することを怠っておりません。去る昭和48年11月の『三田評論』には,彼の生誕250年を記念するために,当時の経済学部長福岡正夫教授と私の間に取り交わされた彼に関する対談を掲げ,また主として慶應義塾関係者を中心とした「日本におけるアダム・スミス研究」と題する飯田鼎教授の研究を載せ,更に翌12月号には私が「エピメーテウス」の第117回として,「アダム・スミス生誕記念会回想」と題する雑文を寄せました。

こうして,私も全然アダム・スミスを忘れてしまったわけではありませんが,私は久しい以前に学校での経済学史の講義をやめまして,この講座は遊部久蔵君の担任するところとなり,私は経済

学前史と名附けまして経済学成立以前の経済思想史あるいは経済学説史を講じておりますので，スミスの現れるところで私の講義は終りを告げるのです。従ってスミスの研究はとかく怠りがちであります。『国富論』200年に際しても，皆様方に耳新しいお話をいたすことのできそうもないことを先ずお断りいたさなければなりません。

日本におけるアダム・スミス研究の歴史的叙述はこれを前記飯田教授の論文におまかせすることとして，さて，わが福沢先生がスミスの名を初めてお知りになったのはいつのことであったか，それも今の私には不明ですが，先生のお書きになったものの中に最初にスミスの名の現れましたのは，明治7年に上梓された『学問のすゝめ』第5編だとされています。国の文明は上，政府から起るのでもなく，下，小民から生ずるでもなく，その中間から興って衆民の向う所を示し，政府と併立して，始めて成功を期すべきであると論じ，西洋諸国の歴史を案ずるに，商工業の道，一として政府の創造したものとてはなく，その本は皆，中等の地位にある学者の心匠に成ったものばかりであるとなし，その例として，蒸気機関がワットの発明であり，鉄道がステフェンソンの工夫であり，始めて経済の定則を論じ，商売の法を一変したのはアダム・スミスの功であると述べておられます。（申すまでもありませんが，先生のいわゆる「ステフェンソン」はジョージ・スティヴンソンを指すものであり，また前記の諸大家は，いわゆる「ミッヅルカラス」に属するものと記しておられます。が，カラスは，もちろんクラスを指すものでしょう。）

慶應義塾に学んだ石川暎作氏が闘病の生活を続けながら『国富論』の全訳を企図されたことは，7月の『三田評論』に掲げた「経済学事始」において触れたところです。

私は，通説に従い，アダム・スミスをもって，経済学の真創設者と見なし，彼を古典的経済学者の首位に置いています。しかし，これには異説なきを得ません。今，その三四を挙げて見ましょう。

もちろん，近世の経済学とはいちじるしくその意義を異にするものではありますが，とにかく，今日に伝わる文献の中で『経済学』（「エコノミックス」）と題されている最古の著書を残しているものは，ソクラテースの流れを汲むクセノポンでしょう。

クセノポンは一万の軍隊を指揮し，厳冬の氷雪を冒して，アルメニアの漠原を，兇猛な山間の蛮民の間を縫って，1500哩の退却を行った勇将です。

フンク・ブレンタノによって「経済学の創始者」という折紙を附けられ，その著1615年の Traicté de l'oeconomie politique. は「かつて現れた学説の最も完全な一体を包含するものである」と論ぜられているものにアントアヌ・ヅ・モンクレチアンがあります。この人は経済学者であり，劇作家であり，詩人でありました。彼はまた余程の熱情家であったらしいのです。彼はその生涯に，少なくとも2度決闘を行っています。第1回の決闘では重傷を負いましたが，第2回目の決闘では美事な

勝利を獲て相手方を倒しました。彼は絞首台を避けて英国に亡命し，次いでオランダを訪れ，フランスに帰って富裕な寡婦と結婚し，その持参金で金物工場を建設しました。そうして彼は貨幣偽造の罪に問われ，また，その言論に累せられて流謫の身となり，ついにノルマンディの新教徒一揆に加担して落命しました。彼が旧教徒の一団に襲撃され，ピストルの一撃を受けて死んだのは1621年10月8日のことと記されています。しかし彼は，ただに経済学の創始者の名を冠せらるべき人物でないばかりでなく，また，斬新な独創的な意見を有する経済論者でもなかったようです。

パトリック・エドワード・ドーヴの著によりますと，英国における「経済学の真の創設者」はアンドルー・ヤランタンであるということです。ヤランタンの生涯も前者ほどではありませんが，かなりに数奇なものでした。彼は長老教会員として，また，旧共和政府の軍人として，彼のいわゆるプレスビテリアン・シャム，プロットに坐して，1661年，入牢の苦を嘗めました。彼の著は見ようによっては，まことに興味あるものですが，しかし，彼を英国経済学の始祖と称するものは，前記ドーヴの外にはあまり見かけません。

『余剰価値学説史』のいわゆる「近世経済学の創始者」，サー・ウィリアム・ペティの生涯もまた頗る波瀾に富んだものでした。彼は羊毛工業地帯として有名なテスト河畔の小市，ラムヅィの貧しい織染業者の第三子として生れ，14，5歳の頃，一商船の船長徒僕として勤務中，近眼のため砂州警戒の尖塔を認めることができず，船を浅州に乗り上げる危機に瀕せしめて，船長に索条で殴打されたり，また，脚を挫いてカン近くのフランス海岸に，おいてきぼりを喰ったりしましたが，後，医師として先ず名を成しました。1651年12月14日，私生児殺しの罪に問われてオックスフォードで死刑に処せられ，甚しく残忍で，かつ，大手際な待遇を受け，州執行官によって既に死んだものと認められ，解剖室内に置かれたアン・グリーンという少女を蘇生させて，一層その名声を高め（この少女は法律上死人として取扱われたのですが，事実上生存を続け，結婚して数人の子の母となったと伝えられています），長くアイルランドに居住し，同国の叛徒から没収した土地の測量に従事して，巨富を積むの基いを開き，1687年12月16日夜ピケデリーの邸宅で，壊疽を病んで長逝しました。彼の政治経済上の著書を見ますと彼を経済学の始祖と見るよりも，むしろ，後に統計学に発達した「政治算術」（ポリティカル・アリスメティックス）の始祖の一人と見た方が適当と思われます。彼を英国のカメラリストと呼ぶ人もあります。

幾多のドイツ学者によって，経済学の真創設者と目され，また，マルクスによって「ブルジョア経済学の全体系を編み出した最初の英国人」と言われているサー・ジェームズ・スチュアートの一生もまた，決して平穏無事なものではありませんでした。

スチュアートはかつて次席検事を勤めたことのあるサー・ジェームズ・スチュアートの唯一人の男の子としてエディンバラ市に生れ，幼にして，文典学者（グランマチシアン）として名声の高かったジェームズ・バァディのノース・バァイクの塾に送られましたが，いわゆる大器晩成の方でして，優秀な学生として

知られる以前に，先ず悲劇俳優として有名になりました。彼はノース・バァイク校で定期的に催される演劇に出場し，シェークスピア劇『ヘンリィ4世』の国王に扮して非常な喝采を博したと伝えられています。

彼はグラスゴオ大学において卓越したローマ法学者ハーキュリーズ・リンヅィの指導の下に法学の研究を積み，同34-5年1月25日，24歳で弁護士団の一員となることができました。次いで彼は当時の流行に従い，失う所が多くて，得る所の少ない欧州旅行を試み，ライデン，アヴィニヨンを経て，スペインに入り，更にローマに向いました。彼はローマでジェームズ2世党のいわゆるジャコバイトの領袖らと交り，ここに約20カ年に亜んたる後年の亡命流寓の種が蒔かれたのです。

彼が英国王位の僭称者チャールズ・エドワード・スチュアート，すなわち，いわゆる「少僭称者（ヤング・プレテンダー）」の計画に対してどこまで積極的な役割を演じたかは全然不明です。チャールズ親王が1745年5月，フランスからスコットランドに渡り，エディンバラを占領した時，既にラナーク郡におけるその家族の所領地コールトネスに隠退しておったスチュアートは，その妻の病気を名としてエディンバラに帰って夏を過していました。同じ年の10月に彼は「少僭称者」のために政治的折衝を行うためにパリに向って出発しました。しかし46年4月15日のキュロドン・モアの敗戦はジェームズ2世党の希望を消散させてしまいました。

戦後，スチュアートはフランスに亡命し，初めセダンに流寓しましたが，1747年，その家族をオングームアのオングーレームに居住させ，経済および財政の研究に没頭しました。彼はその後，家族をパリに移しましたが，フランスとの戦が始まりますと，55年10月フランダーズに移り，ブリュッセルおよびスパアに居住し，57年にはフランクフルト・アム・マイン，同6月にはチュービンゲンに居を構え，58年夏にはチロールを過ぎて，ベネチアに赴き，パドオウァに転じ，60年10月チュービンゲンに帰り，翌61年オランダに移り，同年冬アンウェルスに居を定めました。

1762年8月25日，彼の住宅は突然200人のフランス兵によって包囲され，彼自身は逮捕せられて，国事犯囚としてシャルルモンスの要塞に引かれました。その間に，彼の家宅はオーストリア政府の許可を受けて，捜索され，押収された書類はパリに送付されてしまいました。しかしながら，幸にして犯罪を立証する何物もその書類中に発見せられなかったのですが，しかし，フランス当局は戦時中秘密に付することを便宜とする同国の事情に彼が通暁していることを知って，容易に彼を解放しようとしませんでした。スチュアートの妹は彼に伴って獄舎に赴き，彼の妻は英国に向って出発し，損傷せられた妻の総ての感情と侮辱せられた婦人のあらゆる熱誠とをもってこの暴挙を自国政府に訴えました。11月3日，平和の準備が成って後，スチュアートは12月13日，初めて解放されることができました。やがて，彼の政治的苦難時代が終了すべき時機が来ました。スチュアートは希望に満ち，感謝の念に溢れてロンドンに向い，63年エディンバラに帰り，幾許もなくコールネスに退隠の生涯を送ることとなりました。彼の18年にわたった労作の結晶である『経済原理』（An

Inquiry into the Principles of Political Oeconomy. Being at Essay on the Science of Domestic Policy in Free Nations.）の稿を終ったのは，この幽棲裡においてでした。この2巻本の出版者アンドルー・ミラーとT・カンデルはこの書に対して500ポンドを支払いましたが，しかし，1767年にこの書が世に出ました時，その売れ行きは決して迅速ではなかったということです。

帰国後，痛風の悩みを除いては，彼にとって唯一つの憂愁のたねは，その隣人らが彼の経済思想に対して冷淡だったことです。彼は最も巧妙な弁論家であって，アダム・スミスの如きは彼の著書よりも，むしろその談話によってよく彼の主張を了解したと言っておる程です。そうして彼はその雄弁をもって周囲の人々を化して保護主義を信奉させようと努めたのですが，彼らは，すでにスミスの所説によって全然穀物輸入の自由を信ずる者となっておりましたので，これら「グラスゴオの理論家」に対して保護論を反復しても効果のなかった旨を率直に告白しています。彼は1780年11月26日，67歳で長逝しました。スチュアートは1740年7月，大陸旅行から一時スコットランドに帰り，旅行中に識り合いになったエルチョオ卿の同胞であり，ウイミス伯の長女であるレーディ・フランセスと結婚しました。この伯爵令嬢には，当時としては決して少ないものとはいうことのできない6,000磅の財産が附いておりました。1744年8月7日，夫婦は一男を挙げました。これが1805年，その父の著作集6巻を上梓したヂェネラル，サー・ジュームズ・スチュアートです。

彼の著は重商主義的信念がデーヴィッド・ヒュームによって，理論上，根本的に克服され，撃破された後において，これを合理的に表現しようとしたものです。彼はマッシィやヒュームによって明らかにされた貨幣と資本との間の区別を摑むことができず，また，利子の本質を正解し得ない憾みのあるものでした。そうして彼の大著は時代思潮の上に殆んど何等の影響をも及ぼすことがなく，その出版の後，9年にして現れたアダム・スミスの『国富論』が華々しい成功を収めた後は，全く忘れ去られたのです。しかしながら，19世紀に入って彼が再発見された時，フッフェランドを初めとして，ヘレンシュヴァンド，レーベルグ，ロッシャア，バズバッハなどのドイツ学者は絶大な讃辞を彼の上に浴せかけることを惜しまなかったのです。彼はしばしば経済学説史上において，アダム・スミス以上に功績あるものと認められ，また，経済学の真の創設者と目されました。斯くの如き賞讃は必ずしも不当であると言うことができません。経済政策原理を体系化しようとした点において，人類増加の自然的ならびに合理的諸因を検討し，その増加が利用し得可き食料の増加に従うことを明確にした点において，価格が流通裡における貨幣の定量によって支配せられる事実を断乎として否定した点において，価格と価値とを区別し，価値決定の諸原理を列挙した点において，仕事と需要との間の均衡を研究した点において，また，競争の本質および機能を探究し，一方的競争によって経済的均衡が攪乱せられるおそれのある場合には供給をして需要と一致させるために，むしろ統制を行わなければならないことを力説した点において，特に彼は経済学説の発達に貢献する所のあるものです。

以上挙げて参りましたスミス以外に経済学の始祖を見出そうとする説には，いずれも，それぞれ多少の根拠があり，多かれ少なかれ幾分の支持者もあることと存じますが，いずれも，重農学派の中心人物フランスワ・ケネーのそれには及ばないように思われます。戦争直前のことですが，元の帝国大学教授難波田春夫氏は，その著『国家と経済』において，我国の経済学史家はいずれも皆，ケネーを経済学の始祖と見なすものであって，これに対して唯一の例外をなす者は高橋であると述べておられました。まことに光栄至極で御座います。

初めはケネーと激論し，後には彼に説破されて，その讃美者と変じ，重農学派の基いを開くに至った多弁饒舌の侯族ビクトル・ミラボォによって，「社会を恵み，これを飾った他の多くのものの外，主としてこれに安定を与えた三大発明の一」とまで礼讃された『経済表』(Tableau Oeconomique.) が彼の全経済理論を「実際上，単に六つの出発点と帰着点を連絡する5本の線から成り立つ一つの表の中に」総括しようとした企図は，まことに，「経済学の幼年期」における「最も天才的な妙想」であったに違いありません。

ケネーの父ニコラは，最高裁判所に属する清廉な法曹でしたが，数奇な運命に弄ばれて，その子の教育すら全然等閑に附したと伝えられていますが，実は農業を主とし，傍ら雑貨を小売し，雑務に従事していた暮しの豊かでない人だったというのが本当らしいのです。子女の数は13人とも12人とも伝えられていますが，ケネーがその中の第八子，第四男であったことは疑いがないようです。彼は11歳に達してなお素読すらなし得なかったそうです。13歳で父を失い，医師になろうとして16歳の時，数里先きのもぐり外科医の家に住み込みましたが，1カ年でここを去り，1711年10月パリに赴き，ピエール・ヅ・ロシェフォールという版刻師の徒弟になりました。ここで習い覚えた版刻の技術が後年あの面倒な『経済表』を彫り上げるに役立ったといわれています。

ケネーはいくばくもなく，サン・コーム外科医学校やパリ大学医科に学び，また，パリの有名な病院，オテル・デューその他の病院に勤務し，パリに留まること5年の後，1716年，オルヂュリュという村に赴き，更に転じて，セーヌ河畔のマント市に移りましたが，同市の外科医組合から親方の資格を得ることができず，やがてパリ外科医学校の免状を受け，18年マント市で目出度く開業することができました。その時，彼は24歳でした。爾後，彼が医師としての成功は目覚しいものがありました。

彼は1736年には『動物経済に関する実体的試論』(Essai physique sur l'économie animale) を公にして，生理学の哲学的基礎を説明し，1747年にはこれを増補して3巻とし，人体生理の上に心理学を建設しようとしました。そうして，彼はその結論において，自然の権利として自由を主張すると共に，また，人類の社会性を説き，ここに彼が後年の経済学説の根柢を成すに至った社会哲学を概言いたしました。

やがてドニ・ディドロの『大百科辞典』(Grand Encyclopédie) は，齢すでに60に垂んたるこの老医

に初めて経済問題にその筆を染める機会を与えました。彼が1756年に無署名で同辞典第6巻に寄せた項目は『明証』という形而上学上のものでしたが，同年更に『小作人』を同巻に送り，次いで翌57年『穀物』の1項をその第7巻に掲げました。両項共にその子の署名に隠れています。

ケネーは以上3項目の外，『人間』，『租税』それに『金利』の3項目ならびに形而上学上の1項目を草しましたが，同辞典が1757年に官命によって禁止され，秘密出版となったので，ケネーはこれに関与することを中止しました。『人間』の手稿の複写はオーストリアのステッファン・バウアー博士によって1890年にパリの国立図書館で発見され，1908年同博士によって『経済及び社会学説史雑誌』(Revue d'histoires des doctrines economiques & sociales) の初号に掲げられました。この写稿は，もとケオフィール・マンダールの文庫から出たものであるということです。『租税』の方は，チュルゴォの註記を施したものがリモーヂュのオートヴィエンヌ県立文書保管所に所蔵されていることが明らかとなり，ギュスタッヴ，シェルによって同じく1908年，前掲誌の第2号に発表せられました。また，未発表の『金利』に若干の訂正を施したと思われるものが，「ニサッグ氏」の変名を附してつとに1766年の『農業，商業および財政雑誌』(Journal de l'agriculture du commerce, et des finances.) 誌上に登載されました。ケネーは更に1758年，ミラボー侯爵の『人間の友』(L'Ami des Hommes, ou Traité de la Population) 第4巻に幾分バークリィ僧正の『質問者』(The Querist) の態を学んだ『人口，農業および商業に関する興味ある質問』(Questions intéressants sur la population, l'agriculture et le commerce) と題するものを掲載しました。

デュ・ポンはこの一文をケネーの筆に成ったものといい，デイルはケネーとマリヴュルの合作にかかるものと説いています。

こうした先行諸論篇の後に，いよいよ「天地開闢以来の三大発見の一」と称せられる『経済表』が公にせられることとなるのです。

ケネーは，先ずルイ15世の寵妃ポンパヅール夫人の知遇を受けて，その侍医となり，次いで国王の侍医に任ぜられて，1749年以来，ヴェルサイユ宮殿内に居住しておりました。『経済表』は1758年12月，同宮殿内の小部屋に新たに設けられた印刷場で刷り上げられたものだそうです。国王とポンパヅール夫人はいずれも興味深く印刷の進行を見ておりました。国王自らこの書の校正を行ったというような逸話が伝えられています。初版本は今日に至るも，まだ一部も発見されたことを寡聞にして聞いておりません。印刷部数は僅かに4部であったといわれています。翌1759年の第2版も著者がその必要上，僅かに3部だけを翻刻したに過ぎないものですが，その内のペンで訂正を加えた一部が1890年にバウアー氏によって発見せられ，1894年に英国経済協会によって，ケネー生誕200年を記念するがために写真版にとられて世上に流布することになりました。

『経済表』の邦訳は，つとに我国において松崎蔵之助博士によって，その監修にかかる『経済志叢』の第1編として，『経済大観』の題下に明治35年9月に出版されています。原著が公にされて

から143年の後であります。博士が本書を『経済大観』と訳されたのは，これを『経済表』と題するよりも，かえって「其の名の実に適せる」ものがあると考えられたがためです。現在においては昭和8年に発兌せられた増井幸雄，戸田正雄両氏の共訳が岩波文庫本として一般に行われています。なお本表各版の異同については相鉄興業の故渡辺建氏の詳細な研究があります。

ケネーは1764年4月15日にその知己ポンパヅール夫人を喪い，次第に朝廷の寵遇を失し，1767年，70年ならびに71年と相次いで襲来した穀物の凶作は自由交易論を著しく不評ならしめ，71年のケルンに出陳せられたヴァッセ作の彼の胸像は，穀価引上げ政策の張本人の像であるとして民衆によって破壊せられようとし，彼の学派の機関である『市民日誌』(Éphémerides du citoyen) は63巻を発行したのを名残りとして1772年5月廃刊の運命に遭遇し，74年5月10日にはルイ15世の崩御に遭い，同年後期に退職を命じられ，からだは80歳で，頭は30だといわれた彼も健康漸く衰え，僅かにチュルゴォの改革の端緒を見ただけで，同年12月16日午後7時，ヴェルサイユで永眠しました。享年80。同月20日，ミラボー侯爵は，彼の大理石胸像の前に，おおよそ，この世にありとあらゆる讃詞を羅列してその追悼演説を行いました。

一時はその学徒によりまして，「欧州の孔子」「現代のソクラテース」「近世のモーセ」とまで礼讃されたケネーも，アダム・スミスの『国富論』が現れてから，ひとりケネーばかりでなく，諸先輩の踏査的努力が蔽い隠されることになり，経済思想上における敵も味方も，同じくこの書を出発点とするようになりました。

スミスは1723年に生れました。彼の生れたのは長らくこの年の6月5日と伝えられておりましたが，それは洗礼を受けた日で，生誕の日ではないとされています。彼は1737年11月にグラスゴオ大学に入学し，ここに40年まで在学し，更にスネル基金の給費生として，オックスフォード大学のベリオル・カレッジに入りました。彼は1746年8月15日の頃までオックスフォードに留っていたらしいのです。

彼は1750年11月1日にジョン・ラウドンの死によって空虚となったグラスゴオ大学の論理学の講座を担任することとなりました。ところが同大学で倫理哲学の講座を担任しておったスミスの恩師，フランシス・ハッチェソンの直接後継者トマス・クレーギイが51年1月27日に，リスボンで長逝しましたがために，スミスは翌52年4月29日，その後継者に任命されました。スミスが論理学の講座から倫理哲学のそれに移った動機は，彼がいわゆる実体学の「蛛網科学」を嫌悪し，人間の幸福と成全を念とする倫理哲学の主題に興味を有したに存することは勿論ですが，これより生ずる物質的所得もまた，幾分大であったと考えられています。

そうしてスミスは1759年春，すなわち彼がグラスゴオ大学教授に任命せられてから9年の後になって，初めてその二大偉著の一を公にしました。『道徳情操論』(The Theory of Moral Sentiments.)

がこれです。

この書の結構の精巧と行文の流暢と有効な引例の豊富とは普く承認され嘆美されました。彼はこの書の出版とともに当代第一流の著作者中に列するの世界的承認を受けたのです。

1759年4月12日附けヒュームの書翰中には，スミスの『道徳情操論』によって動されることの大であった一人にチャールズ・タウンゼンドのあったことが記されています。タウンゼンドはダルキース伯爵夫人と結婚した人で，夫人の長子に，当時，史家の父ハラムの下にイートンに学んでおった三代目の若いバックルー公爵ヘンリイがおりました。タウンゼンドは，この若い貴族を『道徳情操論』の著者の監督の下に委ねたい希望をオスワルドに漏しておったのですが，1763年になって彼は12月25日附の書翰で，スミスを公爵の旅行附師傅として招聘したい旨を伝えました。招聘の条件は在外中の旅行費並びに1カ年300ポンドを支給する外，爾後生涯1カ年300ポンドの年金を与えるというにあったのです。スミスはこれを承諾しました。彼はこれによってそのグラスゴオ大学における所得の約2倍を受けることとなるのです。

スミスは64年1月末，ロンドンでバックルー公爵の一行と合し，2月初めに彼らと共に，パリに向って出発し，2年有半の歳月を海外で送りました。そうして，彼はフランス滞在中に，チュルゴオ，アベ・モルレー，エルヴェシウス，それにケネーらと会談する機会を得たのです。スミスはその学説上において果してどこまで仏国学者の影響を受けたかが，しばしば，問題として取扱われています。

一行はその中の一人であった公爵令弟キャンブル・スコットという19歳の青年が，69年10月18日に全くの人違いで，パリ街上で刺されたがために帰期を早め，遺骸を携えてロンドンに帰ることになりました。一行がドーヴァに着したのは11月1日で，スミスは67年5月にカアコオディに帰棲しました。彼は，フランス旅行中，1764年7月5日にツールズで，その先輩で親友のデーヴィッド・ヒュームにあてた手紙の中で，「私は消閑のために一書を書き始めました」と書いていますが，これが，彼が『国富論』に筆を着けたことを意味するものと内外の学者によって一般に考えられていましたが，今ではこれは別の書であることが明らかになりました。『国富論』は彼が母と一緒に，その郷里カアコオディに住むようになってからの著作です。

スミスは1770年に，一先ず，この大著を脱稿したのですが，断えず，これを拡大し，改訂して，更に6カ年を費しました。ウィリアム・パルトニィあての1772年9月5日附けスミスの手紙の終りには「娯楽の欠乏と一事について思索することが余りに大であったがために生じた不健康」，その他の障害のために，更に数カ月その上梓を遷延するのやむなきに至ったと記しています。

スミスは1773年春，その草稿に最後の補正を行い，これを携えてロンドンに向いました。精励，労作のために著しく心身を害した彼はその出発前4月16日附けでヒュームに書を送り，彼をその遺稿管理人たらしめました。著者がロンドンで行った調査は予期以上に遙かに重要なものがありまし

て，その稿本に対して多大な訂正増補を施すの必要を生ぜしめました。

1775年の初めになりまして俄かに衰弱を来たした彼の親友ヒュームは，焦燥の極，1776年2月8日，エディンバラから書を寄せて「私は筆不精な点では君に譲らないが，私が君のために憂えるの念は，私を駆って筆を執らしめる。君の著作は既に久しい以前に印刷に付せられたと伝えられているが，未だ広告される運びに至っていない。如何なる理由に拠るのであるか。バヴァリアの運命が決せられるまで待つとしたならば，君は久しく待つこととなるであろう」と言っています。

スミスは『国富論』が出版されて後，平穏無事の生涯を送り，1777年11月の頃，エディンバラの関税事務官に挙げられ，84年5月23日，高齢の母を見送って後，1790年7月17日に長逝しました。先きに挙げた「経済学の始祖」が，いずれも数奇の運命を辿ったに比べますと，まことに穏やかな学者生涯でした。

かつて侍医頭を勤めた医学博士入沢達吉氏は，その著『随筆楓荻集』の中で，「扨て世の中には不思議のこともあるもので」「経済学の先駆者中には医者が第一位を占めてゐる」と述べておられます。なるほど，経済学説史上に重要な地位を占める人物の中には医術と多少の関係のあったものが，かなりに多く見出されます。

ギリシャ経済思想史上で最も輝しい名はアリストテレースのそれでしょう。彼の家は，医術の神と崇められたアスクレーピオスを祖先とする一族から出たことを誇りとしていました。彼の父ニコマッホスは医師として名声高く，自然哲学および医学上の著書6篇を著わし，また，マケドニア王アミュンタス2世の信任厚い侍医でした。そうして，アリストテレース自身も，亡父の残した外科用の建物，器具，薬剤などを使用して，開業医か薬剤師になろうとしたと伝えられています。

一部の論者によって，経済学の始祖と見なされたサー・ウィリアム・ペティが医師であったことは既述の通りです。そうして，ついに，フランスは医師フランスワ・ケネーによって最初の経済学派フィジオクラート学派が開かれることとなったのであります。経済学史上に重要な地位を占める人物の中に医術と多少の関係のあったものが，かなりに多く見出されることは，入沢博士の申されるごとく，必ずしも全然不可思議な偶然と見るよりも，むしろ，早くからして，人間社会を生物もしくは人体と同一視し，生理学上の法則を社会的領域に適用し，有機的類推を行わうとする風が存しておったによるところの多いものと考うべきではありますまいか。経済学が一個独立の学問となって後も，経済学に転向し，もしくは医師で経済学者を兼ねる人も決してないわけではありますまいが，しかしながら，概して言えば，有機的推論は下火となり，生きた有機体と人間社会を同一視しようとする企図は，大体において失敗に帰し，従って，経済学は生理学や医学から示唆を受けることが少なくなりました。そうして，心理学によって先ず経済現象を解釈しようとする傾向が強くなったように思われます。

経済理論と経済政策を混同するは大きな誤りだとされています。カール・メンガーの言葉で言えば，こうした誤謬は，化学を化学的工芸学と混同し，生理学や解剖学を医術や外科学と混同するに比せらるべきものであります。まことに，理論と政策は根本的に相違するのでありまして，これら両者は本質的に共通な何物も存することがないと信ずる学者が多いのです。しかし，私どもは，経済方面の研究者が，先ず第一に政治に関心を有するものであり，非理論的な経済的見地と政治的要求との間に密接な相互関係が存しておったばかりでなく，政策に科学的基礎を与えようとして理論の発見される場合が甚だ多かったことを認めなければなりません。不偏不党，虚心平意，唯，単に理論そのもののために理論を探究した大経済学者が，古来，果して何人あったでしょうか。単に偏執によってのみ，我ら人間は何物かを成し遂げることができるという感が深いのです。

最初の経済学派と称されている重農主義者は18世紀のフランスにおきまして，工業政策の犠牲に供されて，農業が疲弊しようとしている事実に動かされて，真の国民的経済政策がフランス国土の大生産力を利用するにあると観たのです。こうして，彼らは，人間の社会的関係においても，一定の自然科学，永久不変の真理である原則が存在しなければならないことを認め，彼らの国家が悩んでいる大禍患の原因が，こうした原則の侵害にあるという思想に逢着したのです。

まことに重農学派の出現と共に，初めて統一的法則が求められ，その存在が声明されました。しかしながら，重農主義者にとっては，「自然的秩序」はひとつの理想であって，事実ではなかったのです。彼らの学説は，形而上学的に考察せられた自然的秩序に関する単なる思弁に過ぎざるものでした。

しかるに，アダム・スミスになりますと，総ての富は農業に発するとなす重農主義的意見を排し，あらゆる富の泉源を労働において見出されるものと説くと共に，彼に至って，「自然的秩序」は一個の事実として取扱われました。それは存在せしめらるべきものではなくして，既に存在しているものであります。それは疑いもなく，凡百の不全——特に誤れる人的立法によって抑制せられています。しかし，それはこれら一切の物の上に優越するのです。社会の人為的組織の下に，完全にこれを支配する自然の組織が現実に作用しつつあることを見出したのです。そうして彼はその作用の態様を叙述することができたのです。重農学派にとっては統治と支配の制度に過ぎなかった経済学は，スミスの手中において，現存する事実の観察と分析とに基ける自然科学となったのです。

まことに「国富論」の中に説かれた原理はその出版後10年をでないで英国の経済，財政の上に非常な効果を収めることができたのです。若い宰相ウィリアム・ピットは1787年スミスがロンドンに参りますと，一再ならず彼と会見して財政上の諸問題を諮問いたしました。伝えるところによりますと，両者がウィンブルドン・グリーンのダンダス家で会合した際，スミスが遅れて参りますと，ピットを初めとして同じく座にあったアディントン，ウィルバーフェース，それにグレンヴィルらはいずれも皆，起立して彼を迎えました。スミスが，彼らが長く起立を続けているのを見てその着

席を求めますと，ピットは「否，貴下の着席せられるまでは私どもは着席いたしません。なぜかならば私どもは皆あなたの学生だからです」と申したとのことです。スミスもまた，ピットを讃美することが大でして，一夕彼との会食が果てて後，アディンソンに向って，「非凡なるかな，ピット，彼は私自身よりもよく私のアイデアを理解する」と申したそうです。

経済学はアダム・スミスに至って，政治の術の一部であるよりも，むしろ，人間社会の学の一部として考察されるようになったと言われています。しかし，事実，彼および古典学派の経済学説は自由主義の実現を企図する政治的伝道と価格経済の科学的分析の混合物でした。

さきに引用した福沢先生のスミスの経済学説紹介も，彼の自由主義が少ピットをして，その政策をスミスの主張に従って，百八十度転回せしめたことを意味するのでしょう。

かつて，慶應義塾その他で，このスミスの名著を「富国論」と称すべきか「国富論」と訳すべきかについて激しく論争されたことを思い出します。滝本誠一博士は第3巻に現れる定義を取って，この書が富国策を論じたものであると主張されましたが，他の学者は少なくも，この書の第1編第2編が国富に関する理論であることを主張して「国富論」説を力説しました。これも既述した両面からくるものでしたろう。

（名誉教授）